

## 創立40周年に寄せて

清水良彦 (名誉会員)

北海道家畜管理研究会が、創立40周年を迎えたことは、大変に喜ばしく、会員の皆様と共にご同慶に耐えません。心よりお祝い申し上げます。

北海道の畜産は、世界に例を見ないほど短期間に急速に発展し、本道農業の重要な地位を占めるに至りました。これは、官民が一体となった努力と、先人・先輩の方々の数え切れぬ業績の賜と敬意を表します。

畜産の技術開発・指導は、かつては大学、試験場および関係機関が一体となって生産現場に行いました。しかし、次第に教育を担う大学、技術開発を担う試験場、普及・指導を担う普及機関と役割が明確化したためか、それぞれの有機的なつながりが弱くなってきた感じがします。さらに、最近では各機関の組織再編や研究者の同族集団化と相まって、生産現場と離れた研究が多くなっているのではないかと危惧しています。

畜産とは個別の技術の積み重ねで、最終的には経営まで含めた広範囲の検討が必要です。この研究会は、部門を越えて畜産系、工学系、獣医系、経営系などのいろいろな分野の人たちが集まり、所属も大学、試験場、行政、農協、会社をはじめ生産者と幅が広いのが特徴です。したがって、この研究会が生産現場と関係機関との交流の中心となって果たしてきた役割は大きく、今後ともその役割を継続・発展していくようお願いします。

創立30周年記念号に故新出先生が「搾乳ロボットの現状と将来」と題して寄稿されています。その後10年間における工学系の技術開発と普及はめざましいものがあります。

一方、牛の病気が少なくなった（とくに繁殖関係）という話はあまり聞きません。また、環境問題も対策が進んだようではありません。

BSE事件も我々に大きな教訓を与えました。生産効率や省力化など作業の機能性を追求するあまり、家畜の機能を忘れていなかっただろうか。

北海道の畜産経営は、量（規模拡大）から質（経営内容の充実）への大きな転換期を迎え、加えて環境問題の対応も急務と言われて久しいです。今後、北海道の風土に適した北海道型畜産の確立に向けて、大学、試験場、関係機関および生産者が一丸となって取り組むことが、益々必要であると信じます。